

これからの子どものために

関口はつ江

四月、幼稚園も新しい幼児を迎える。各々の園にたどたどしく、また柔らかなざわめきがやってくる、と、わくわくする思いである。

しかし、今年も多くの子ども達をやさしく育ててきたいいくつかの園が、やむなく園を休んだり、閉じたりする事態も起きている。このような時であるからこそ、園児集めのために、世の中の流れに迎合するのではなく、大切なものを見極め、確かなものを掴まなければならないように思う。

今の幼稚園では、多くの場合、幼児は生活や文化の断片を訓練されている。集団行動、音楽や体育、文字や数等々。しかし、人間の本质や生活の総体にかかわる学習はどうなのだろうか。

現代は価値の多様化の時代と云われる。いろいろな姿や振舞いをする若者が混然と共存し得、社会的

な地位や役割による在り様があいまいになり、「教師も当りはずれ」と云われるように、行為の責任が個に帰着するようになってきた。「人間的である」ということが「私的である」とことと一体化され、社会的な役割にそれらしい思い入れが消え、役割行動の基準すらもまた、各々が勝手に作り出してしまっている。育児放棄の母親や、子どもと対話のできない教師などを社会が認め、温存してしまっている。

おとな達のこの身勝手さと、幼児に執拗な迄に画一的な訓練を強いることの落差は、人間が自己や社会を見極め、自らの願望を主体的に昇華するようになる前に、自らを統制する外側の枠組みをはずしてはならないとの直感によるものであろうか。

しかし、子どもが自分を知り、自分で考え、自分で行動することを教えられずに、おとなになって、

価値の多様化の名のもとに、個人の自由と権利が最優先される社会に送り出された時、はたして社会の中で自分の位置を作り出せるのだろうか。

ある作家が最近、「愛犬が死んで涙に暮れているうちに、獣医を告訴することを考えついたら、忽ち涙は乾いた。」という人の話を引き合いにし今の日本では己の幸福を守るためには他人を宥してはならないこと、我々の知識は損得にだけしか使われないことを、を嘆いていた。現代文明は親が死を願う程の未熟児でさえも生きることが可能にした。こうした生物界の基本原理である適者生存の原理を越えてしまった時代であるからこそ、逆に生命の尊さがわからなくなっているのだと思う。

今の子ども達は、本当に自分にとって大切なものは何かを知ること、大切なものを自分の内側で守り、育てること、を十分には教えられない。価値あるものは形をもち、他と交換可能な客観性を備えたものであることを、幼い時から教え込まれて育て

ば、愛するものの死をかけたがえのない事実として、その苦悩を進んで引き受け、そこから新しい自己を生み出すような精神的な営みが、更に深く生きることの欲びにつながることを信ずることはできないであろう。愛犬はおるか愛児の死でさえも売り渡せるのは不思議ではない。

次の時代は哲学と宗教の時代といわれているけれども、小賢しさが先に立った、小さなおとなのような偏った子どもがもてはやされ、自らの身体と感覚で真の価値を追い求めようとする子どもの活動が、当り前であるが故に軽視される限り、新しい時代の創造は難しいように思う。

これからの未来を切り開く力となる人間の想像、創造力は、空飛ぶ風船に空飛ぶ思いを、土の中のみみずに生きることへのいとおしきを感じることができるとような、子どもの生き生きとした発想の延長線上にあることを自覚して、子どもらしい生活を保障する幼稚園を目指したいものである。

(郡山女子短期大学)